

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成25年9月30日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科： 教育学研究科臨床教育学講座

職名・学年： 博士後期課程3年

氏名： 山本一成

助成の種類	平成25年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 在外研究中期助成		
研究課題名	「持続可能な開発のための教育」における幼児期の「相互依存性」の経験とは何か －自然体験の生態心理学的理解を通して－		
受入機関	Children, Youth & Environments Center, University of Colorado		
渡航期間	平成25年7月20日 ～ 平成25年9月18日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	500,000円	
	使用した助成金額	500,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	往復航空券	256,000円
		住居費	100,000円
		ESTA申請	1,400円
食費・生活費		124,960円	
海外旅行保険		17,640円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 渡航開始以前に前もって交付していただけることや、使途の範囲が広いこと、手続きが簡略であることなど、研究を進める上でとても助けられました。若手研究者が国際的な研究を行っていく上で、こうした助成があることは非常に重要な意義があると考えます。今回の助成について、心より感謝申し上げます。		

## 成果の概要／山本一成

UNESCO の委員を務める Louise Chawla 教授の指導を受け、持続発展教育（ESD）に関する最前線の知識と具体的なプロジェクトについて学ぶことができた。現地では文献研究とフィールドワークを並行して行った。

主なフィールドワークとして、イタリアのレージョエミリアのドキュメンテーションを取り入れつつ自然とアートの融合を通じた幼児教育を行う Boulder Journey School の見学、持続発展教育の一環で子どもがボルダー市内の都市計画デザインに参画する Growing Up Boulder Project の見学を行い、日本における ESD 実践の手がかりを得た。また、滞在期間中にコロラド大学にて開催された国際民主主義教育会議（IDEC）に参加したことにより、世界各国の ESD 実践者と情報交換・交流ができたことも大きな成果であった。

文献研究としては、UNESCO の発行する資料および、アメリカで行われている ESD の実践に関する資料を中心に研究を行った。研究成果については、その一部を『京都大学教育学研究科臨床教育学講座紀要』に投稿した。また、現在作成中の論文についてはコロラド大学が発行する国際学術雑誌である、'Children, Youth and Environment'誌に投稿を予定している。成果の概要として、上記の論文で明らかにした内容を紹介する。



写真1 Boulder Journey School

**研究成果① Reconsideration of moral education and ecological imagination in early childhood : “Comparative dialogue” between the Kyoto school of philosophy and Pragmatism, 『京都大学教育学研究科臨床教育学講座紀要』(査読中)**

Steven Fesmire 氏の論文、「生態学的想像力と道德教育のねらいー京都学派とアメリカのプラグマティズムを通して」に対して幼児期の持続発展教育の立場から応答する論文を作成した。Fesmire 氏の中心的な論点は、道德教育のねらいは一律の倫理的な基準を子どもに教授するのではなく、子どもの生態学的な想像力を育むことにもつべきであるというものである。そして以上の論理は、「経験」を哲学の中心に据えてきたアメリカのプラグマティズムと京都学派の哲学を結び合わせるものでもある。Fesmire の主張は、幼児期の ESD 実践に対しても重要な理論的視座を提供している。教師と子どもが生態学的な想像力を働かせることは、いかに生命

が「相互依存」の関係の中で生きているかを経験し、リアリティをもって実感できるかにかかわっている。本論では、幼稚園の「いただきます」の場面のエピソードの記述を通して、教師がいかに幼児の生態学的な想像力を育み、生命の相互依存性を経験する環境を構成できるかについて論じた。

## 研究成果② **A Reflection on Unaware Lives in a Daily Life: Toward Education for Sustainable Development in Early Childhood, *Children, Youth and Environment*** (投稿予定)

幼児期の ESD に向けて「気づかれていないいのちの経験 (experience of unaware life)」という実践概念を提唱した。UNESCO が ESD の指針として重点を置く「いのちへの敬意(respect for life)」「いのちへの責任(responsibility for life)」という理念が、いかにして実現可能になるかについて考察し、具体的なエピソードの記述によって例証した。考察のなかで、幼児教育の現場で起こる「気づかれていないいのち」の経験に3つの次元があることを提唱した。一つは、「生命のパターン」の経験、二つめは「他のいのちとのつながり」の経験、三つめは「生きている他者の存在」の経験である。これら3つの次元は、普段何気なく生活している中では気づくことができないが、教師の関わりや他の生命との出会いの中で不意に立ち現れ、経験されることがある。教師は、日常に埋没することなく、これらのいのちに気づくことによって、その気づきを子どもと共有することができる立場にいる者である。事例の考察を通して、感じること、想像すること、ケアすること、省察することが、教師の教育的なかわりにとって重要な意味を持っていることを明らかにした。

### まとめ

以上の研究成果の意義として、ESD における哲学的・理念的なレベルでの議論と、教師の実践レベルでの議論を架橋した研究となったことが挙げられる。ESD は、国際的な協調の要となる理論的支柱を確保しつつ、それぞれの文化によって多様な実践を行っていくことで実現可能になるものである。「気づかれていないいのち」の概念は、文化によってその解釈と実践のかたちは多様になるが、理論的な方向性としては一般性を持っている。幼児期の ESD の研究は世界的に見ても量的・質的に未だ十分なものではないが、本研究はその発展へ向けての一端を示すものとなったと考えることができるだろう。今後の展開として、日本の幼児教育の特徴と、日本の生命観との関連をとらえるなかで実践研究を行いつつ、国際的な議論を行っていくことを考えている。